

# 陽子のものがたり

## —小説『氷点』試論—

工藤 茂

三浦綾子の小説『氷点』は、周知のように昭和三十九年七月、朝日新聞の一千万円懸賞小説に入選した小説である。当時その懸賞金の多さに驚いた覚えがある。小説は同年十二月から翌年十一月まで朝日新聞朝刊に連載され、昭和四十年十一月朝日新聞社から刊行された。

この小説の舞台となるのは北海道旭川市の郊外で、小説は昭和二十一年七月二十一日、夏祭りの昼下がりから始まる。前年の八月十五日、日本は敗戦を迎えた。戦争末期から終戦、そしてそれ以後の日本を体験してきた私には、そこに描かれている世界が、当時の日本の状況でまるで反映していないように思われる。虚構であるのだからそれでも構わないと言われれば、そうかもしれないと考えられないのだが、小説の持つリアリティに欠けることは間違いない。その他にも主要な登場人物、例え

ば辻口病院の院長辻口啓造、その妻夏枝、辻口の学生時代からの友人で産婦人科医の高木雄二郎の描き方がステレオタイプであるといった欠点もある。それにも拘らずこの小説について論じてみたいと思うようになったのは、以下のような理由があったからである。その一つは、韓国からの短期留學生がこの小説を対象に論文を書くというのでその指導に当たったこと。その際、この小説に登場する陽子の設定とその描写が気になったこと。言い換えれば、この小説の特色は「陽子のものがたり」ではないかと思われたことであった。従ってここでは辻口夫妻の養子となった陽子に焦点を絞って考察を加え、この小説の特色を洗い出してみたい。

昭和二十一年七月二十一日、夏祭りのひる下がり、旭川市郊外の辻口病院院長邸からこの小説は始まる。そこには辻口啓造の妻夏枝と辻口病院の眼科医村井靖夫がいた。村井は夏枝に思いを寄せ、夏枝は村井の寄せる愛を快く感じていた。そこへ辻口夫妻の三歳になる娘ルリ子が入って来る。

もし、村井の愛を拒むなら、今ルリ子をひざに抱きあげるべきだと夏枝は思った。しかしそれができなかつた。

「センセきらい！ おかあちやまもきらい！ だれもルリ子と遊んでくれない」

ルリ子はくるりと背を向けて応接室を飛び出して行った。(略)

夏枝はよほど呼びとめようかと思つた。しかし今しばらく村井と二人きりでいたい思いには勝てなかつた。

ところがその夜ルリ子は帰って来なかつた。そして、翌日近くの川原で死体となって発見されたのである。首

には扼殺の跡があつた。

犯人は佐石土雄という赤ん坊連れの男だつた。捕まつた後、彼は留置場で縊死してしまふ。その男の経歴を小説は次のように書いています。

佐石は東京の生まれで幼時両親を関東大震災で一時に失い、伯父に養われて青森県の農家に育ち、昭和九年の大凶作に十六歳で北海道のタコ部屋に売られ、後転々とタコ部屋を移り歩いた。昭和十六年入隊、中支に出征中戦傷を受け、第二陸軍病院に後送、終戦直前渡道、日雇人夫として旭川市外神楽町に定住、結婚した。内縁の妻コトは出産と同時に死亡

右に△タコ部屋▽とあるタコとは前借金で重労働をする人夫たちのことで、重労働に堪え切れずに逃げようとするれば、死ぬよりもひどい目に遭わせられるという。つまり、作者は犯人佐石を社会の底辺に生きた人間として設定しているのである。

犯人の死後連れ子の赤ん坊は乳児院(育児院)に預けられることになる。この乳児院の顧問をしている高木雄二郎は札幌の総合病院に勤める産婦人科医で、辻口の大

学時代の親友であった。

辻口はルリ子を殺したのは佐石だが、妻と村井も同罪だと考えていた。そんなある日、妻の友人藤尾辰子から佐石の子が友人高木が顧問をしている市立の乳児院に預けられたことを聞く。一方夏枝は子供を産めない体に設定されていて、ルリ子代わりの子供を育てたいと思うようになる。

「女の子を育てたいんですの。わたくし、女の赤ちゃんがほしいんですの、ね、おねがいですわ」

(さびしさをまぎらすために子供を育てるなんて！)

人間の子はおもちゃではないんだぞ！)

啓造はそういいたかった。啓造がだまっていると、夏枝はいいつつた。

「ね、一生のおねがいですわ。女の子だと、だんだんルリ子のような気がしてきますわ。ルリ子だと思つて育てたら、供養になると思いますわ」

啓造は女の子などみたくもなかった。特にルリ子と同じ年ごろの女の子を見ると、胸がズタズタにさかれるような切なさであった。

しかし、啓造は後に触れるような目的で高木に交渉し、ルリ子を殺した佐石の子を引き取り、ルリ子が殺されるきっかけを作った夏枝に育てさせることにする。夏枝はその子がすっかり気に入入り、陽子と名づけて大事に育てる。陽子はその名のように太陽のように明るく、素直な子に育って行く。他人への思いやりが深く、他人に決して迷惑をかけることのない、人を超える心身の持ち主のように表現されている。その姿に私は以下に述べて行くような文学の伝統とでもいうような影を見るのである。

## 2

陽子をわが子以上に可愛がって育ててきた夏枝に激変が起こる場面を、作者は次のように設定する。

その日は、部屋いっぱい陽がさしこんで汗ばむほどであった。十二月中旬とは思えなかった。(略)掃除が終わると、夏枝は窓をしめた。

書斎は八畳の洋間だった。(略)

日記帳がペン皿の横にきちんとおかれている(略)夏枝は啓造の日記帳を取り上げてページをパラパラめ

くった後に、それを元のサックに納めようとした。その時、サックの中から折りたたんだ紙が机上に落ちた。それは病院用の太い罫紙に書かれた啓造の手紙であった。

夏枝はその手紙に眼を落とした。△読むうちに、夏枝の顔色が変わった。机のそばに立って読んでいた夏枝は、ずるずるとくずれるように床板の上にかがみこんでしまった。高木宛のその手紙には以下のようなことが書かれていた。

(前略)

高木、わたしはルリ子があつた川原で死んでいた姿を決して忘れることはできないのだ。ルリ子があつた姿を思うと、わたしは陽子が憎いのだ。

「汝の敵を愛せよ」をわたしの一生の課題として生きるなどと、あの時臆面もなくわたしは君にいつた

(略)

正直にいつて陽子は、気味のわるいほど、善意に満ちた子供なのだ。この子の体の中に、殺人者の血が流れているのかと思うと、一人人間とは何だろう

と、わたしは思うことがある。

わたしは、恥ずかしい話だが、あの子の頭をなでることができなかった。(略)

ところが、この間とうとう、あの子の頭をなでってしまった。いつものように「おかえりなさい」ととってきた陽子の頭を思わずわたしはなでてしまった。しかしそのあとが、たまらなかった。わたしは反射的にルリ子の死んだ姿を思い出したのだ。陽子をかわいがつて、果たしてルリ子が喜ぶだろうか、そう思うとたまらなくなった。

手紙にはさらに次のようなことまで書いてあった。

ついでに白状することがある。わたしは、「汝の敵を愛せよ」をかくれみのにした、みにくい男なのだ。君ばかりか自分自身をもダメしながら、実は夏枝をゆるすことができなかったのだ。陽子を引きとつたのは、夏枝に、佐石の子を育てさせたいという残忍な思いがあつたことを、わたしは白状してしまいたいのだ。

高木、夏枝は七年前にわたしを、うらぎっている

のだ。ルリ子が殺された日、夏枝は村井と二人っきりで、一つ部屋にいたのだ。二人がそこで何をしていたか、想像しただけでわたしは今も胸が煮えかえる思いだ。

しかも、夏枝はその後も、村井と通じていたのだ。無論、その場を目撃したわけではない。(省略)

とにかく、わたしは陽子を愛するために、引きとったのではないのだ。佐石の子とも知らずに育てる夏枝の姿をみたかったのだ。佐石の子と知って、じたんだふむ夏枝をみたかったのだ。佐石の娘のために一生を棒に振ったと口惜しがる夏枝をみたかったのだ。(後略)

辻口啓造は学生時代「汝の敵を愛せ」と口癖のように言っていたと小説に書いてある。その実践をするようなことを高木に言って、ルリ子殺しの犯人の子陽子を引き取った。この手紙に書かれていたのは、その裏に隠された真実の目的であった。

夏枝にとってそれは思いもよらないことであった。確かに村井への心の揺らぎはあった。しかし、それは夫を

捨てて村井に走るほど激しいものではなかった。村井への感情は、従って、たとえ夫に知られてもそれほど咎められるものではないと夏枝は思っていた。それゆえ、彼女は夫に愛されている幸福な女だと信じていたのである。夏枝は、ルリ子を殺した佐石の子を育てさせた夫を許せなかった。同時に陽子が佐石の子だと信じることもできなかった。

(嘘だわ。陽子が佐石の子供だなんて……)

(あんな明るい、かしこい、そして優しい子が佐石の子であるわけがない……)

夏枝はそのように思い、△陽子の明るい目の底に、炎のように燃えるふしぎな輝き▽を思った。

この辺りの陽子の表現に注目したい。彼女は尋常な女児としては設定されていない。この場面の前の「つぶて」の章でも、石を入れた雪玉で怪我をしながら、投げた相手の男の子をかばって恨まず、啓造に△おれは、ちょっとした人の言葉でさえも、何日も心にかかって恨むことがある。この七つの陽子に及ばない▽と思わせる所がある。啓造はそこで陽子の幼い時のことを思い出す。

(前略) 書齋で本を読んでいると停電になった。啓造は用事ができて向いの部屋に入ってしまった。

すると、ねむっていたはずの陽子が闇の中を一人はいまわっていた。啓造をみると、ニコツと笑って、陽子はふたたび機嫌よくはいだした。

その時、啓造は何となくゾツとした。生後七、八か月の赤ん坊が暗やみの中で泣きもせず、はいまわっているというのは、たしかに変に不気味であった。

その時の陽子と、今日の事件の陽子を啓造は思い合わせてみた。陽子は天性、恐怖とか悪意というものを持たずに生まれてきたように思えてならなかった。

(人の憎しみを負って生まれていながら、何とふしぎな子供なのだろう)

その夜、夏枝にも作者は「あの子は人を憎むということを知りませんわ」と言わせている。夏枝はまた、そこで「陽子ちゃんの親って、ほんとうにどんな方達なんでしょうねえ」「私たちより立派な人であることは、たし

かですわ」とも言っている。

このような所を注意深く読んで行くと、後述するように陽子のキャラクターが特異なものとして設定されていることに気づくであろう。

### 3

高木に出されなかった啓造の手紙を夏枝が読んだ時から陽子の受難が始まる。

夏枝は、かわいい陽子を思いうかべていた。

(嘘だわ。何かのまちがいだわ)

夏枝は、今は陽子がどこかの死刑囚の娘でも何でもかまわないと思った。しかし、佐石の娘であってはならなかった。

(ルリ子の命をうばった人間の娘だとしたら、これ以上育てて行くことはできない)

(略)

(何という残忍な……)

やっと夫の自分に対する憎しみが夏枝の胸にじかに迫った。

それまで夏枝は精魂かたむけて陽子を愛してきた。その陽子がルリ子殺しの犯人の子だったとは。夏枝はじつと息をひそめていた。その間に自分自身が恐ろしい鬼女に生まれかわって行くのではないかと思われた。それほど啓造がにくかった▽。

「陽子ちゃん！」

夏枝の声がかすれた。夏枝は陽子のほおを両手にはさんで、その顔をのぞきこんだ。形のいい濃い眉。たえず何かがきらめくような黒い瞳。ややうすい形のよい唇。

(この子の中に恐ろしい血が流れているというのか) そのうちに夏枝は、高まる感情が両手に集まるのを感じた。どうしてそうなったのか彼女には分からなかった。

「陽子ちゃん！ おかあさんと死んで……」

言葉の終わらぬうちに、夏枝の手が陽子の首にかかった。

「いや、いや」

陽子がもがいて声をあげた。

陽子の目に恐怖のいろが走るのを、夏枝はみた。

(略)

「死ぬのよ。二人で……」

二人が死んでいるのをみて、ろうばいする啓造の顔が目につかんだ。

夏枝は、何かにつかれているようであった。(略)

これが陽子の第一の受難である。啓造と夏枝の葛藤と陽子の知らない所で行われた殺人とが、七つの陽子に、突如、罰のように降りかかってきたのだった。陽子はその衝撃に家出して夏枝の友人辰子の所へ行く。辰子は心配してその原因を陽子に聞くが、陽子は何も言わない。

「一年生の家出にも感心したけれど、告口や陰口のない子なのにも、ちょっと驚いた」

辰子は夏枝にそう電話するのだった。

繰り返すが、作者は陽子をこのような人間として描いていく。この主人公の描き方がこの小説の特色となっている。

さて、第二の受難は陽子が三月三日のひなまつりの学芸会に出るといふ時にやって来る。みんなと一緒にそろいの白い服を着て踊るので、白い服を母にねだるのだが、

夏枝はわざと陽子にその服を作ってやらない。兄の徹が気をもむうちに、陽子は一人だけ赤い服を着て踊る。作者はそれを徹の目を通して次のように描く。

真っ白な服を着た六人の生徒たちの真中に立っている陽子の赤い服が燃えるように鮮やかであった。

「雪やこんこ あられやこんこ」

レコードが鳴ると、陽子一人が雪の中で踊っているように、きわだった。陽子一人があらかじめ赤い服を着る約束の舞台のように思われた。徹は思わずにこりとした。

赤い服のためか、陽子は一番上手に見えた。陽子は手をたたいても、首をひとつ曲げるのでも、どこか他の生徒より愛らしく見えた。

しかし、夏枝はとうとう学芸会には来なかった。

陽子が第三の受難に遭う前に、作者は啓造に一つの試験を与える。

昭和二十九年九月二十六日、台風の大突風にあおられて青函連絡船洞爺丸が沈没し、千百五十五人が犠牲となる事故があった。この船に作者は啓造を乗せるのである。

彼は辛くも助かるのであるが、そこで一人の女を救って自分が犠牲になった宣教師の姿を見る。啓造は八生きているということが、どんなに厳しい事実であるかを、今度の海難事故で知ったつもりだった。あの痛ましい犠牲の上に生きている事実を生涯忘れずに、本当に真剣に生きよう、と旭川に帰って来る。それ以来、彼の生き方には微妙な変化が見られるようになる。学生の時のように、書店で聖書を手に取り、マタイ伝第一章の処女懐胎の箇所を読んで、妻夏枝のこと、陽子の出生のことを考えたりする。あるいは以下のような想いにふけったりする。

(愛するとは……)

ふっと、洞爺丸で会った宣教師が思い出された。

(あれだ！ あれだ！ 自分の命を相手にやることだ)

啓造は思わず膝を打った。

(だが……おれにはできない。長い間、陽子を膝の上に置くこともできなかった。そして、やっとだきあげたと思ったら、おれはただ感覚的になってしまふところだった。そんな自分に、あの宣教師のまね

はできない)

それはなぜかと、啓造は思った。

(おれは、汝の敵を愛せよという言葉は知っていた。しかし、人を愛するのは、スローガンをかかげるだけじゃ、だめなんだ。あの宣教師は、もっと大事な何かを知っていたんだ。単なる言葉じゃないものを知っていたのだ。言葉だけじゃなく、もっと命のあるものを知っていたんだ)

それを啓造は知りたかった。

一方、夏枝は夫の啓造とは反対に陽子への態度が冷たくなっていく。作者は△陽子は、叱られるようなことはほとんどしない。叱る種がないということが、夏枝には腹だたしかった▽と書き、△夏枝の陽子に対する冷たさが、啓造にも感ぜられた。次第に啓造は、陽子にチョコレートや本を買って帰るようになった。それがまた夏枝の感情を刺激する▽と書く。これは継子いじめには違いないが、世にいう継子譚のそれとは違う。ルリ子を殺した男への憎悪と、その娘を自分に育てさせるという残忍な夫の行為に対する憎悪が陽子に向けられた結果のいじ

めであった。

このような経過をたどって陽子は第三の受難に遭う。

#### 4

「おかあさん。給食費ちょうだいね」

陽子は今朝からこれで三度目の催促をした。

その度に夏枝は心得たように返事をして、忙しうに台所に立っていく。陽子は(略)柱時計を見あげている。夏枝はまたしてもなかなか台所から出てこない。

ふたたび陽子は時計をみあげた。もう時間ぎりぎりだった。

「おかあさん、学校がおくれるわ」

「そう、早くいらっしやい」

「給食費は？」

「あら、そうだったわね。今ちょっと忙しいの。あしたにしてね」

夏枝は茶碗を洗っている。陽子はだまって家を出た。陽子は泣きなくなった。しかしめそめそするの

は、きらいだった。

このように夏枝はわざと陽子に給食費をくれない。そこで陽子は牛乳配達をしてお金を得ることにする。ある吹雪の日、陽子は牛乳屋の夫妻の会話から自分がもらい子であることを知る。

（もらい子？ わたしが、もらい子だって……）

しかし、ふしぎに陽子はひどく驚きはしなかった。子供心にも、もう大分以前から、夏枝の中に本当の母親でないものを、陽子は感じとっていた。自分でも何となく、もらい子ではないかと思うことがあった。だが今、はっきりとそのことを知ったのは淋しかった。

ところが、陽子が帰ると夏枝は「まあ、こんな吹雪に、かわいそうに」と夏枝を抱き締めてくれた。陽子はうれしかった。そして、もらい子のことは誰にも言わなかった。

陽子の第四の受難は、陽子が中学校を卒業するその卒業式の時に襲いかかってくる。

卒業式の日、陽子は卒業生を代表して答辞を読むこと

になった。その日の朝、彼女は昨夜清書した奉書紙を紫の風呂敷に包んで登校した。

夏枝は鏡をのぞきこむ度に、陽子の若さと美しさに嫉妬した。十五歳の陽子に、四十二歳の自分を較べる滑稽さに彼女は気づかなかつた。白雪姫の継母の悔しさが身に沁みた。彼女は陽子が答辞を書いた奉書紙を、白紙にすり替えておいたのである。

答辞を読む時になって奉書紙を開いた陽子は、一言も発することなくそれを畳んだ。会場にざわめきが起きた。陽子は一礼すると落ち着いた足取りで壇上に入った。そして以下のような挨拶をするのである。

「みなさま、高い所から誠に失礼ではございますが、卒業生一同を代表致しまして、一言答辞をのべさせていただきます」

「実はただ今、答辞を読もうと思いましたが、これは白紙でございました」

「どこでどう、まちがいましたか、わたくしにもわかりません。けれども、これはとにかく、わたくしの不注意であることは、たしかでございます。御来賓の方々。先

生方。在校生のみなさま。そして本日晴れの門出をなさる卒業生のみなさま。わたくしの不注意を何卒おゆるしになって下さいませ」

そこで陽子は深々と頭を下げた後に、さらに続けて言う。

「(略) わたくしといたしまして、何日もかかって書きました答辞が、まさか白紙になっているとは夢にも思わないことでした。それでただ今は少しばかり驚いたのでございます」

「このように、突然、全く予期しない出来ごとが、人生には幾度もあるのだと教えられたような気がいたします」  
陽子はそう言って、次のような内容の答辞を即席に述べる。

予定通りにできないこと、困難なことにあっても落ちて着いて行動しよう。それが先生に教えていただいたことである。大人の中には意地の悪い人もいるだろう。泣かせようとする人もいるだろう。しかし、そのような大人の前でも、にっこり笑って生きて行けるだけの元氣を持ちたい。それだけでここにいらっしゃる皆様方へのお礼

になると思う。

それは立派な答辞であった。嵐のような拍手が起こった。夏枝はへめまいを感じた。拍手をされている陽子が憎かった。

この場面は小説の「下」の「答辞」の章にある。この頃から夏枝の陽子に対するいじめは、その質が微妙に変わる。愛娘を殺した男の娘へのそれに重ねて、ライバルへのそれが加重するのである。

## 5

小説の中の時間が流れ、徹は北大の医学部の学生になっている。その徹がもらい子の陽子を思い遣って、二人がきょうだいであることを言おうとした時、陽子は自分ももらい子であることを、小学校の四年生の吹雪の時から知っていたと話す。それを聞いた徹には、△そんなに小さい時から、生きぬくと知っていて、どうして素直に明るく生きて来ることができたのかと思うと、よく知っているつもりで陽子が、突然全く未知の女性のようになぞにつつまれて見えた。全く、何と陽子の表情には暗い

影がないことだろう。自分より陽子のほうが明るいということが、不思議に思われた。

作者は繰り返し陽子をこのような人間として描くのである。そこに私は人間を超える陽子のキャラクターをよむのであるが、そのことについては後述しよう。この陽子の前にこれまでとは違う人間が登場する。徹の友人北原邦雄である。北原の出現は、夏枝に陽子をライバル視させるさらなる契機を与えることになる。

夕食が終わると徹がいった。

「街に行ってみようか。何しろ北原は旭川がはじめてだからね」

「じゃ案内してもらおうか。陽子さんも行きませんか」

「もちろんさ。陽子は君の接待役だ」

徹がいうと、夏枝が、

「陽子ちゃん、すまないけど、るす番をしていてね。おかあさんはちょっと買物もあるのよ。いいでしょう」

と、徹と陽子の顔を半々にみた。

「おとうさんが帰ってくるよ」

徹が不快そうにいった。

「おとうさんは今夜九時ごろお帰りですって」

夏枝の声がはずんでいた。

北原たちの車を見送りながら、陽子は夏枝の態度が気になった。不愉快というより、もっと奥深く心からみつくものだった。

こうして陽子の最後の受難は、その一步を踏み出す。

夏枝は北原に第二の村井を見いだす。それは次の札幌の喫茶店の場面に顕著である。

「わたしたちは何に見えるでしょうか」

と二度も繰り返し夏枝を、北原はくだらないと思つた。

(恋人に見えるといったら喜ぶ人なのだ)

たしかに夏枝が四十歳を越しているとは誰も見ない。誰にも三十そこそこに見られるだろう。逆に二十三歳の北原は、二十七、八歳に見えるから、よそ目には恋人のように見えるかも知れなかった。しかし北原は夫ある女が、他の男にひかれる話は、たと

え映画でも小説でもきらいだった。それは即ち、北原自身の亡き母の神聖が犯されることだったからである。

夏枝のライバル意識は、陽子へ来た北原の手紙を勝手に北原につき返したり、北原と妹の写真を北原と恋人だとわざと偽ったりして陽子に苦痛を与える。しかし、これらの受難は陽子にとってまだ小さいものであった。陽子が自殺せざるをえない最大の受難は、年が明けた一月十四日にやって来る。その日辻口家を訪れた北原の前で、夏枝は陽子の秘密を明かすのである。

陽子の目がきらきらと美しく輝いていた。その美しさが夏枝の憎しみを誘った。

「いっても、いいのね、あなたの秘密を」

夏枝は陽子を見すえた。

「いいわ。何をおっしゃても」

「おばさん、おやめなさい」

北原は、秘密という言葉におそれた。

「でも、この人がいってもいいと申しておりますも

」

夏枝の顔は蒼白だった。

「どうぞ、伺いたいわ」

陽子の言葉が、夏枝にはふてぶてしくひびいた。

「北原さん。この人の父親は、徹の妹を殺した犯人ですよ」

夏枝の声が上ずってかすれた。

「おばさん！」

北原はかみつくようにいって立ちあがった。陽子がかすかに眉をくもらせたが、ほとんど表情を変えなかった。

「もう一度おっしゃって」

陽子はまだあまりにも思いがけない夏枝の言葉に、かえっておどろくことができなかった。あまりにも信じがたい言葉だった。

「何度でもいいますわ」

夏枝は肩で大きく息をした。

「ルリ子は、あなたの父親に殺されたのですよ」

陽子が、かすかにうめくような声をたてた。

「うそだ！」

北原が叫んで、陽子のそばにかけよった。陽子はいつのまにか、ピアノの横にたっていた。

「うそじゃありません」

夏枝の目がつりあがって、唇がけいれんしていた。

この後の陽子を作者は以下のように描写する。

△いま、陽子には、いろいろのことがよくわかった。

小学校一年の時に夏枝に首をしめられたこと、中学卒業の答辞の紙をすりかえられたこと、それらがどんな意味を持っていたかを、陽子のはっきりと知ることができた。陽子はだまって、夏枝をみつめた。見つめたまま陽子はのろろと夏枝のそばに寄って行った。夏枝は、おびえたように退いた。陽子はその夏枝を、目の中に吸いこむようにじっとみつめた。憎しみの目ではなかった。悲しいほど淋しい目であった。▽

ここでも陽子は、そのような仕打ちをした夏枝を憎悪することはしない。しかし、その目からきらきらとした輝きは失われていた。思慕する北原に向けた目も暗かった。そして翌日、陽子は三通の遺書を残してルリ子の殺されたという川原で自殺を図る。それはまさに処刑であった。

しかし、両親に宛てた遺書には二人への恨みは書いてなかった。そこには自分が無垢で正しいのだという信念によって生きて来たこと、悪口、いじめは自分のソトのことだと考えて来たこと、それゆえ、どんなつらいことにも耐えることができたこと、しかし、自分が殺人者の子と告げられて、その信念が崩れたことが書いてあった。

△父が殺人を犯したということは、自分にもその可能性があることなりました▽。△自分の中の罪の可能性を見出した私は、生きる望みを失いました。どんな時でもいじけることのなかった私。陽子という名のように、この世の光の如く明るく生きようとした私は、おかあさんからごらんになると、腹の立つほどふてぶてしい人間だったことでしょう。けれども、いま陽子は思います。一途に精いっぱい生きて来た陽子の心にも氷点があったのだということ▽。

小説の題名が「氷点」であった所以は、このようにして陽子の遺書に書かれることになる。

△私の心は凍えてしまいました。陽子の氷点は、「お前は罪人の子だ」というところにあつたのです。私も

う、人の前に顔を上げることができません。(略) この罪ある自分であるという事実には耐えて生きて行く時にこそ、ほんとうの生き方がわかるのだという気も致します。私にはそれができませんでした。残念に思いますけれども、私はもう生きる力がなくなりました。凍えてしまったのです。

おとうさん、おかあさん、どうかルリ子姉さんを殺した父をおゆるし下さい。

今、こう書いた瞬間、「ゆるし」という言葉にハッとするような思いでした。私は今まで、こんなに人にゆるしてほしいと思ったことはありませんでした。▽

陽子の罪ではない。父の犯した罪である。しかし、陽子の父が殺人を犯したということは、自分にもその可能性がある▽という認識や、△自分の中の罪の可能性を見出した▽という認識は、彼女が初めて人間の原罪を意識したことを示すものであろう。それはまた、愛する北原に宛てた遺書にも、次のように書かれてあった。

△「陽子には殺人犯の血が流れている」との母の言葉が耳の中で鳴っています。この言葉は、私を雷のように

うちました。私の中に眠っていたものが、忽然と目をさしました。それは今まで、一度も思っても見なかった、自分の罪の深さです。

一度めざめたこの思いは、猛然と私自身に打ちかかって来るのです。

「お前は罪ある者だ。お前は罪あるものだ」と、容赦なく私を責めたてるのです。

北原さん、今はもう、私が誰の娘であるかということとは問題ではありません。たとえ、殺人犯の娘ではないとしても、父方の親、またその親、母方の親、そのまた親とたぐっていけば、悪いことをした人が一人や二人必ずいることでしょう。

自分の中に一滴の悪をも見たくなかった生意気な私は、罪ある者であるという事実には耐えて生きて行けなくなつたのです。▽

作者はこの小説において、人間にとって原罪とは何かという問題を追及したという。そもそも原罪とは、旧約聖書創世記に見える、アダムが神に背いて犯した最初の罪を言う。従ってアダムの子孫である人間は、生まれな

がらにして原罪を負うのだという。殺人犯の子と言われた陽子は、その衝撃の中で強く原罪を意識するのである。その内容を検討して見ると、登場人物の全てがその罪を背負わされていることに気づく。つまり、啓造も夏枝も人間としてそこに存在していることが罪なのであった。しかし、それに気づかず、日々さらに罪を重ねて陽子を自殺へと追いこむ。そしてその結果、自分たちの犯した重大な結果に愕然とするのである。作者は陽子を設定する時、彼女にそのような役割を持たせていたのだと考えられる。

陽子自殺の知らせを受けて、札幌から高木雄二郎が一枚の写真を持って駆けつける。そこに写っていたのは佐石土雄ではなかった。△陽子を三十歳代にしたような、陽子そっくりの女性と、眉の秀でた知的な和服姿の青年であった。それは高木や啓造と同時代に理学部に在学していた、秀才と名の高かった中川光夫と彼の下宿先の三井恵子だった。二人は恋愛した。終戦になり、出征していた恵子の夫が、明日にも帰って来るかという時になって、恵子は妊娠した。まだ姦通罪のある時代で、墮胎も

罪になる時代であった。困った二人は高木に相談した。高木は知り合いの産院の離れに恵子を預かり、そこで生まれたのが陽子だった。つまり、陽子は殺人犯の娘ではなかったのである。

最初から小説を丹念に読んでゆくと、確かに陽子が衝動的にルリ子を殺した殺人犯の娘ではないことが分かる。そのように作者は伏線を敷いている。それはこれまで、しばしば引用して来た小説の部分でも分かるに違いない。陽子はその名のように明るく素直で、他人への思いやりが深く、他人に決して迷惑をかけることがない。気味のわるいほど善意に満ちている。夏枝は、あんな明るい、かしこい、そして優しい子が佐石土雄の子であるわけがないと思ひ、啓造もときどきはそのような思ひを抱く。従って読者は、高木が陽子の実の親を明かす時、そうだつたに違いないと思うようには構成されている。しかし、新聞の連載小説として読んでいくと、どんでん返しにあったような気持ちにさせられるのも事実である。これは小説にとつてはマイナスであろう。

ところで、陽子がこれまで展望して来たように造形さ

れていることが、私に以下のようなことを考えさせる。  
それについて述べて見たいと思う。

6

小説『氷点』を読んでいて、この小説に登場する陽子の設定とその描写が気になった、と私は最初に書いた。その一つは陽子の出自にかかわることである。最初は殺人犯佐石土雄の娘として登場する。そして、実は大学の理学部の秀才中川とその下宿の主婦恵子との間に出来た不倫の子だったという設定に変わる。それは端的に言えば陽子を異常な誕生の子として設定しているからである。啓造はその陽子の出自に重なるようにして、聖書の受胎告知の章を読み返す。「雪虫」の章ではそれが妻夏枝と村井の關係に關連づけられてはいる。だが、その後を読んでもいくと門灯の下に立って啓造を待っている陽子に、イメージの上で繋がっていった陽子の出自と重なることに気づく。つまり私の言いたいことは、陽子の出生の異常がイエスのそれと重なっていくように読み取れるということだ。

もう一つは、陽子がどのようなじめにあってもめげることなく、△素直に明るく√生き、その△表情には暗い影が√ないということである。その姿に私はイエスを重ねて見ていた。陽子にモデルがあるとすれば、それはイエスではあるまいか。そこで私は陽子に対するいじめを「受難」という言葉で表現した。文学空間について言えば、聖書のイエスと違って、陽子の置かれたそれは移動することがない。従って、陽子はイエスのように空間から空間へとさすらうことはない。その上、その受難は殆ど継母夏枝によって作られたものであった。そのような相違を認めながらも、私には陽子がイエスに重なって見えてきた。それは作者が陽子という人物をそのように設定したからである。そうでないならば、陽子の描写は不自然である。既に指摘してきたように、陽子の表現には人間を超えるものがあるのだから。つまり、陽子は非人間的な存在としてではなく、超人間的な存在として表現されている。そして最後は、自己に内在する「原罪」の意識の厳しさに自己の△氷点√を自覚して、凍死しようとするのである。その契機をなしたのが、継母夏枝に

よつてもたらされた最後の受難であった。それを私は処刑と表現した。陽子にイエスの影を読んだからである。

実は日本の文学のモチーフの中に以上のそれに類似したものがある。貴（卑）種流離譚と呼ばれるものである。陽子の誕生の異常、もたらされる受難。その構造は流離こそないが貴（卑）種流離譚のそれである。おそらく作者にはその意図はなかったであろう。意識だになかったことであろう。が、こうして読んで見ると貴（卑）種流離譚のそれが変容しながら『氷点』に流れこんでいることに気づく。何故なのだろうと考えて見る。結論は、これが日本文学の伝統というものだろうということである。それが作者の意図（意識）を超えて、現代文学の中に流れこんでいたのであった。小説『氷点』を「陽子のものがたり」と読む所以である。

（本学教授）